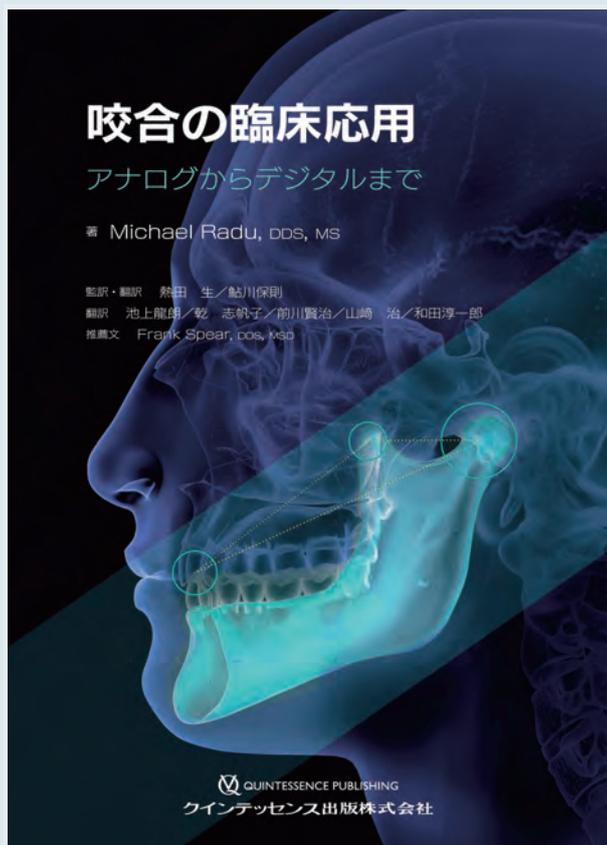


咬合を学ぶなら、まずこの1冊から！

咬合の臨床応用

アナログからデジタルまで



著：Michael Radu, DDS, MS

監訳・翻訳：熱田 生／鮎川保則

翻訳：池上龍朗／乾 志帆子／前川賢治／
山崎 治／和田淳一郎

推薦文：Frank Spear, DDS, MSD

エビデンスに基づく咬合論を、
シンプルに解説！

補綴臨床において、患者の現在の咬み合わせでは必要な治療が行えないことがある。その場合、どうやって新たな咬合関係を構築するのか？ 患者がその関係を（たとえば患者が心地よいと感じる咬み合わせで）決めるのか？ それとも、生理的な上下顎間関係を見つけ出すという科学的原則を基に決めるべきか？ 新しい咬合関係をどうやって記録し、歯科技工所に伝えるか？ 本書は、治療を成功裏に行うための咬合の概念をシンプルに解説している。

目次

1 部

1章 われわれにはなぜ、咬合が必要なのか？

2章 咬合の実践原則

3章 咬合の公式

4章 咬合は2種類しかない

2 部

5章 咬合採得の原則とその手法

6章 検査と治療計画立案法

7章 既存の咬合関係での咬合採得法

8章 新たな咬合関係を付与するための咬合採得法

9章 咬合調整法

10章 機能的運動範囲の採得法

11章 歯科技工所とのコミュニケーション法

12章 咬合採得におけるアナログとデジタルの比較

補遺



本書の特長

1部では、指針となる原則と咬合の簡易モデルについて概説！

咬合の3原則

原則2：下顎は三脚に類似している

下顎は、後方に2本の大きな脚(下顎頭)、前方に多数の小さな脚(歯)が一体となった三脚としてモデル化することができる(図2-2)。下顎は、閉口筋の力によって閉口する。2つの下顎頭と切歯点と離れており、閉口筋の力のベクトルは、重力が三脚に作用するように下顎に作用する(図2-3)。

図2-2 上下反転した下顎は、三脚に類似している。

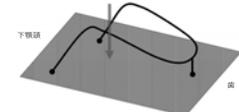


図2-3 下顎、前歯、下顎頭の位置関係は、三脚を意味する形になる。



咬合における下顎位の役割

図3-2 下顎位は下顎頭位と前方基準点からなる。



表すことができる(図3-2)。この家数を前式の式に代入すると、以下に示す、咬合に関する新しい、より詳細な公式が得られた。

$O(\text{咬合}) = IC(\text{咬頭歯合}) + CP(\text{下顎頭位}) + ARP(\text{前方基準点})$

この公式は、咬合をその基本的な3つの構成要素、つまり咬頭歯合、下顎頭位、前方基準点に分類している。つまり、この公式は静的咬合、つまり上顎歯に対する下顎歯の最終的な位置を規定している。換言すれば、これは患者が咬んでいるときに上下の歯が咬頭歯合位で咬み合っているときの咬合である。

しかし、われわれは閉口筋、つまり下顎の移動経路も考慮する必要がある。下顎の機能的な移動軌跡は「機能的運動範囲」(envelope of function: EoF)と呼ばれ、これはより大きな概念である下顎限界運動範囲内に存在する。機能的運動範囲は、歯が部分的に咬合接触している時の下顎限界運動の一部である。空間における動的な下顎位は、下顎の歯の移動と上顎の歯との相互作用によって決定される。これはガイアミックスオクルージョン(動的咬合)と呼ばれる。

機能的運動範囲を咬合の式に組み込むと、静的咬合と動的咬合の式は次のようになる。

$O(\text{咬合}) = IC(\text{咬頭歯合}) + CP(\text{下顎頭位}) + ARP(\text{前方基準点}) + EoF(\text{機能的運動範囲})$

機能的運動範囲の記録は複雑であるため、10章で分析する。

単独歯の咬合形成における咬合採得

図7-4 模型を正確に咬合採得するためにトリミングされたPVS製の咬合採得母体。



図7-5 トリミングされていないPVS製の咬合採得母体は、不正確な咬合採得となる可能性がある。

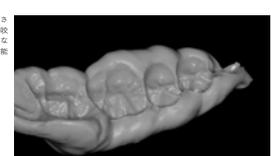


図7-6 PVS製の咬合採得母体を用いて咬合させた歯科技工士専用の模型。



単独歯の咬合形成における咬合採得

図7-7 a, b: 患者が咬頭歯合位で閉口している状態を、口腔内スキャナを左右の頬側に配置する。c: 咬頭歯合位でのデジタル咬合採得データ(水色部)を全顎スキャンデータと一致させ、デジタル模型をハイチアル咬合器に装着するための咬合関係を確立する。

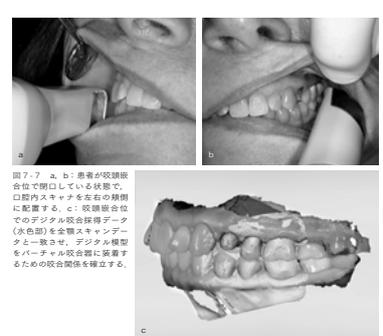


図7-8 口腔内スキャナ(TRIOS, 3Shape)の「患者固有の運動」機能を用いて記録された下顎運動。

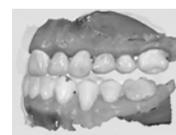


図7-9 大目歯状、とくに歯間で付合歯が貫通しているように見える、いわゆる「交差(intersections)」を認めるデジタル咬合採得。



2部では、診断、治療計画立案、状況に応じた治療方法について具体的に解説！

著者：Michael Radu(ミカエル・ラドゥ)

2大陸をまたぎ3つの国で、40年以上にわたる臨床経験を有する歯科医師。自身の仕事は咬合に関する歯科医師の治療の助けになることとの信念をもち、歯科医師に講義や教育を行っている。



さらに、巻末の補遺では、本書内で紹介した概念をさらに深め、最新の知見を踏まえながら歯科医療の未来を考察。

きりとり線

注文書 咬合の臨床応用 アナログからデジタルまで

モリタ商品コード:208041042

冊注文します。

●お名前	●貴院名	●ご指定歯科商店
●ご住所 (〒)		
●TEL	●FAX	
		支店・営業所

※ご記入いただいた個人情報は、弊社の新刊案内、講演会等の案内に利用させていただきます。
※ご指定歯科商店がない場合は送料をいただき、代金引換宅配便でお送り致します。